社会福祉計画論序説〔Ⅳ〕*

——対象構成：ソーシャル・ワークと一般システム理論——

高　田　真　治

Ⅰ　一般システム理論のソーシャル・ワークにおける意味

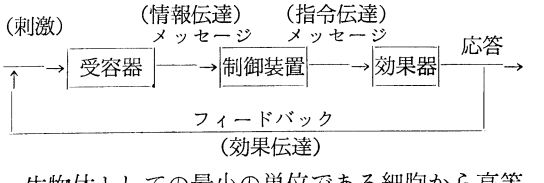
Ⅰ-i　「科学の骨格」

社会的・地理的移動の増大，急速な技術の進歩など，たゆみなく変動しつづける今日の社会は，人間のニードの変質化とともに多様化，また社会環境への不適応を促進し，その発現を容易にした。したがって必然的にサービスも多様化が要求されることとなるが，いうまでもなく現状は多様なニードに対応しうる状態ではない。この状況下で，個人（ないし地域社会）それぞれのニードに応じたサービスを個別に提供し，それらの成長・発達を促すよう援助することは，ソーシャル・ワークの本務ともいうべきものであろう。そこで，ソーシャル・ワークの将来として最も考慮され得べくは，ヒューマン・サービスの増大，ジェネラリストとともになおいっそうのスペシャリストの要求，またそれらを管理・計画するマネージメントあるいはプランニングの重要性であるといえる。[1] サービスへの要求が拡大してゆくに伴ってそれらを全体的に把握し，かつ欠如している部分としてのサービスを明確にし，補完・修正してゆき，そしてそれらのうちから選択された単一あるいは複数のサービスを専門的観点から，より効果あるものとして提供せねばならない。したがって，それらを共通の枠組でとらえる方法としての視点が不可欠であり，次の諸点が課題となる。

1．いかに対象を認識し，これに基づいて援助をすすめるか——固有の視点。
2．サービス効率化のための施設，情報，財政等の管理・運営，ワーカーその他の教育・訓練——アドミニストレーション。
3．以上の根底にあって，同時に包括的に対象としつつ社会福祉を増進させるもの——社会福祉計画論，以上である。

このうちまず第1の対象認識および援助の方法としての固有の視点について考察することにするが，いうまでもなくソーシャル・ワークにおける援助のための介入は専門的な知識，目標設定に基づいてすすめられる専門的介入でなければならない。このためには，いかにして対象を認識するか，そしていかに援助するか，の視点が一貫して示されなくてはならないであろう。対象の認識がソーシャル・ワーク固有の視点によってなされるならば，それにもとづく援助の方法も固有のものといえよう。そこで，ここでは一般システム理論を採用しつつ検討してゆくことにしたい。

近代科学理論では，最近まで機械モデルが最も強力かつ威信のあるモデルであったが，メカニカリーに扱えない複雑なシステムへの全く新しいアプローチを理論的に説明する試みとして有機体を取り扱うようになった。有機体，生物体は相互に依存しあう部分から成る生活体であって，本性としてその生活をやめることなく，かつその生存を長らしめるべく様々な努力をはらうものである。例えば，環境へ順応したり，あるいは自らは滅びても自己増殖によって同じものをつくり残していこうとする（種の保存）。この生活体は一般に循環系，神経系等のサブ・システムを有しているが，環境への順応という面からみると神経系が重要な機能を演ずる。すなわち，通信と制御——情報の伝達とフィードバック，を通して行動し，外界に働きかける制御機構である。[2]



生物体としての最小の単位である細胞から高等

な生物である人間に至るまで，その生存は食物・栄養の摂取，同化作用，代謝によって維持されるわけであるが，これらは操作的に特定の実験状態において閉鎖される場合などの他は一般にオープン・システムである。後述するように従来の機械モデルで説明し得ない生物体における重要な特徴である等結果性 equifinality，および進化あるいは成長・発達は，このオープン・システムの概念によって説明される。しかしこれらは単に機械から有機体へとその発想を拡大したというだけでなく，広い展望の中に位置づけられ，その意味が考察される必要があるであろう。

周知のごとくK・ボールディングは一般システム理論への可能なアプローチとして，経験的分野をそれぞれの分野における基本的な「個体」もしくは行動の単位としての組織がもつ複雑性に応じて，それらがヒエラルキーをもつように配列する方法を試みている。これは「システムのシステム」ともいうべきものであって，理論的知識および経験的知識の両方に現存するギャップについて，なにがしかの理解が得られること，また研究の対象としているレベルよりも下位のもの，さらに上位レベルのものをも研究対象とすべくその方向づけが与えられる，という利点がある。すなわちそのレベル（およびその代表的な実例）とは次のごとくである。

1．静態的構造のレベル，枠組のレベル。（宇宙地理学，解剖学）
2．単純な動態的システムのレベル，時計じかけのレベル。（太陽系）
3．制御機構，サイバネティック・システム。（サーモスタット）
4．開いたシステム，自己維持的構造。（細胞）
5．遺伝・社会的レベル。（植物：細胞内の分業，等結果的な成長）
6．動物。（移動性・目的をもった行動，自覚）
7．人間。（動物システム全ての特徴および自己意識の保持，言語および記号の使用）
8．社会—文化システム。（役割の集合）
9．超越的システム。（究極的，絶対的，不可知的なもの）。[3]

いうまでもなくここでわれわれが具体的に対象とするのは人間および社会—文化システムである。

W・バックレーは，社会システム・モデルの歴史を発展的段階として考察し，今日社会学理論が看過出来ないものは，こと20～30年の間に発達した現代システム理論であると強調している。これは組織化された単純性，混沌とした複雑性とは区別されるべき，複雑な関係のネットで相互に関係している実在 entities の集合である組織化された複雑性を扱う。この目的のために，より全体的，包括的なオリエンテーションを与えるのである。[4]

現代社会はまさに複雑多様である。そしてまた現代社会に生活する人間は，その個体固有の，また環境の影響，その相互作用によって多様な行動を生起せしめることは理解に難くない。そこで福祉の立場からいえば，それらを分析的に，かつ総合的に把握することによって，個人あるいは社会における問題の構造が明らかにされ，したがって最適な援助の方策が講じられるのではないか，と考えるのである。

かくしてボールディングは，一般システム理論は科学の骨格であるとして，その意味を次のごとくのべている。「その上に特殊的な学問分野や特殊的な主題という肉体を秩序立って首尾一貫した知識の集成体となりうるように貼りつけていくための諸システムの枠組もしくは構造，を与えようと目差しているという点にある。」[5]

さらに，このシステム理論は次の三つの主な考察に基づいているといってよいであろう。

1．普遍化——生物系，行動科学，社会科学等において明らかに同様な理論的構成が要求され，単純な物理学の応用では不十分となった。
2．新しいカテゴリーの導入——伝統的科学では以上の領域の問題に対処しえなくなった。多変数システムにおける相互作用，組織，分化，自己維持，目的志向といったものは基本的に重要であり，それらを「非科学的」「形而上学的」であるとして看過できなくなった。
3．学際研究 interdiscipline——伝統的な学問の領域をこえて異った科学の分野における現象に応用できる。[6]

社会福祉は応用科学であり，また実践科学である。したがってかかるシステム理論の視点は，そ

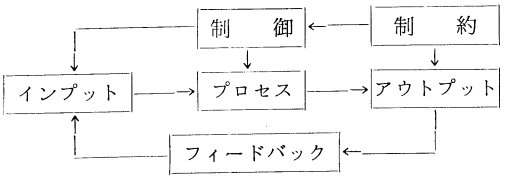
の学問としての体系化，認識すなわち問題の所在を明確にする診断の視点としてのみならず，実践すなわち援助のための視点，そのための科学的な方法を示唆しうると考えられるのである。

I-ii　オープン・システムの特徴

一般システム論が対象とするシステムのレベルは，小は原子，分子から結晶，ヴィールス，細胞，有機体 organs さらに個人ひとりひとり，小集団，社会，惑星，太陽系そして銀河系にまで及ぶ。なかでも J・ミラーはヴィールスから社会にいたるものをリビング・システム——一般システム理論のサブカテゴリーとして考え，特にこれらを対象とするシステム理論として一般行動システム理論 general behavior systems theory を提起している。[7]

ソーシャル・ワークの具体的対象としては，これをさらにせばめて個人から社会にいたる範囲を中心に考えればよいと思われる。これらは人間組織 human organization とでも呼ぶものであるが，要するに一般システム理論のカテゴリーのなかで検討することが可能であると考えられる。このシリーズは，あるレベルのシステムを中心に考えれば，最小，最大のものを除いていずれもサブシステムおよびスプラシステムをもち，オープン・システムとして示される。すなわちインプットとアウトプットをその要素としてもち，境界をこえて他のレベルのシステムとエネルギー，物質または情報の交換をおこなう。これは先の生物体のモデルと基本的に同じであって，一般にインプット—アウトプット・モデルとして示されるものであり，システム・モジュールとして次の図式で示される。[8]

図1　システム・モジュール



行動科学の立場から，ミラーはこのプロセスに対応するものをコーディング coding と呼び，次の三つに分類している。すなわち，本能，インプリンティング，および条件づけ，あるいは学習である。[9] このコーディングというのは，$A_1 \rightarrow A_2$ への変換が定式化しているものであり，したがって将来が予測しうるものであるという。なおこのプロセスは，processing, conversion, throughput とも呼ばれるものであり，その環境からエネルギー，情報をとり入れ，そしてアウトプットへと変換を行こうとをいう。しかし一般に，有機体には先にのべたような機能のゆえに一次的な因果関係ではなく，その多くの変数のダイナミックな相互作用によって非線形の因果関係を有している，という特徴をもつ。ソーシャル・ワークは主として個人（地域社会）をとり扱うものであるが，その場合，個人との関連において，その個人のおかれている環境をも考察の対象としなければならない。すなわち，それをオープン・システムとしてとらえ，その相互作用の特性を考察する必要があるのである。オープン・システムとしての有機体の特徴として強調される点は定常状態 steady state を維持し，同時に成長・発達をしようとすること，および等結果性である。前者はフィードバックによって情報をそのサブシステムに分配し，絶えず内的には変化するなかで，安定また秩序を保とうとするものであり，後者はその初期条件によって結果が決定されるのではなく，それが異っても同じ結果に到達しうる，という特質である。

オープン・システムの他の特性は，リビング・システムにおける機能的統一 functional unity とよばれるサブシステムのダイナミックな相互作用およびフィードバック（生物学的現象の代表的なものはホメオスタシス）であり，いずれもシステムの定常状態を維持ないしは達成しようとする機能である。[10]

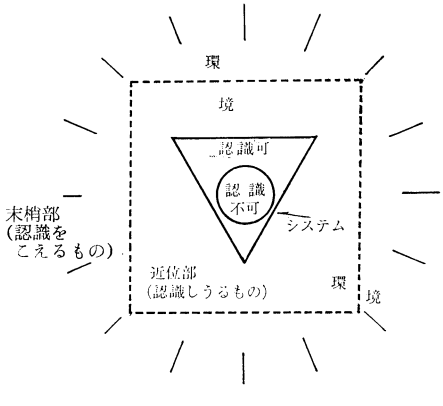
生物体は成分（養分）の流入（摂取）と流出（排泄），生成と分解の中で自己を維持しており，生きているかぎり決して化学的，熱力学的平衡equilibrium の状態にはなく，それとは異る定常状態にある。これこそ代謝という生命の根本現象，すなわち生きている細胞内での化学過程の本質である。[11] さらに等結果性は生物学的調節にとって重要な意味をもっており，ここには遺伝情報（制約）が働いて発生のメカニズムを制御しているのである。

また重要なことは，生物体は進化あるいは成長

・発達をおこなう。すなわちより高い秩序と異質性へ向う推移である。これはエントロピーで説明されうるが，周知のごとくエントロピーとは後述するように熱力学第二法則における概念である。ここで注意しておかねばならないのは，オープン・システムとしての有機体は，その環境との相互作用を通して個体そのものの維持とともに，その環境にあって定常状態を保ち，また順応をすすめようとする。そしてこの過程を経て，個体ないし種としての進化をはかろうとする。しかしこれは有機体，生物体中心の考え方，すなわちメタボリズムにしてもあるいはホメオスタシスにしても生命維持の驚くべきメカニズムではあるが，いわば消極的な有機体の環境に対する反応としての生命現象であって，そこには積極的な環境変革については何ら意味されていない。人間組織，また社会にあっては，個人の環境に対する反応とともに環境の変革も必要であり，また可能であって，次節にみるソーシャル・ワークにおけるオープン・システムの特性は，むしろ相互変革というダイナミックな観点でとらえていくことにしたい。変動の激しい社会における人間の成長・発展は，自然淘汰による進化と同列に考えることができないからである。

このようなオープン・システムの領域のモデルをG・ハーンは次のごとく図示し説明している。[12] ここでの関心は，システムの内部，外部双方の対応関係（このモデルでは組合せによって6通りある），境界を通しての両者の閉鎖性および開放性である。これは両者によってコントロールされうるわけであるから，双方とも開放の場合はコミュニケーションが行なわれるが，一方が開いていて他方が閉鎖している場合には，両者の対応関係は事実上断たれてしまうこととなる。

図2　システムの領域



クローズド・システムにおいては，ある実験条件での化学反応のごとく，達成される最終状態は平衡である。すなわちこの不可逆過程では，平衡状態に達するまでエントロピーは増大するが，それは初期条件によって決定される。これに対してオープン・システムにおいては，エントロピーの増大すなわち不秩序の度合の増大は，そのシステムの崩壊につながるので反対のエントロピーともいうべき負のエントロピー（ネグエントロピー）をとり込み，システムの定常状態を維持し高度の秩序と組織化へと向っていこうとする。このメカニズムによって生物体は進化あるいは成長・発達が可能となるのである。

エントロピーとは物体や物体系の変化の方向を表わす量，つまり平衡状態にない系が平衡状態に向って一方的に移動する事実を表わす量であり，したがって次第にその活動のためのポテンシャルを使い果していき，ついには何の活動も行われない平衡状態（“定常状態”ではないことに注意）に到達する。これに対し負のエントロピーとは，「容赦なく崩壊また不統合にすすんでいかせるクローズド・システムの特性にマイナスのサインを送るが，その不可入性は環境からのいかなる新しいインプットをも除外する。これに対しオープン・システムは，それが消費するより以上のエネルギーを環境からとり入れることによって負のエントロピーを達成することが出来る」のである。[13]

ここでは定常状態が重要な概念となるわけであるが，G・ルビンはこの定常状態をより積極的にとらえている。すなわち，定常状態はたゆみない活動および変化として特徴づけられるが，リビング・システムは画一性，安定性あるいは緊張の緩和のためにべつだん努力しない。むしろ緊張を緩和するよりそれをもっているという，平衡に反抗することが個人における基本的な傾向である。休みのない，常に活動している。また変化している状態にある——定常状態にある有機体は，有機体本来の natural 状態である，ということに注意すべきである。[14]

要するにオープン・システムは，全体としてある目的をもった相互作用をしている諸要素が，定常状態を維持しつつその目的を達成しようとするプロセス，ないしは認識された構成(物)である，といえる。このシステムは外部条件によって攪乱される場合，すなわち緊張や葛藤がおこる場合，その処理を通して定常状態を再形成しようとするし，またこの状態が長期にわたる場合には新たな定常状態を，状況への順応として形成する。したがって，システムの生存をおびやかすような脅威，あるいは危険に対して，それが結果的にどういう状態をもたらすかは，システムのもつ能力にかかっている。システムはその維持のために，「その内外の攪乱要因を制御し，現実の，ないしは潜在的な圧力を緩和するような何らかの方法，手段，仕組みなどを用いて，圧力に対して積極的にないしはそれに近い形で反応しようとする」のである。ここで「圧力」とは，「システムの内外で発生する攪乱が，システムの本質変数を正常な限界の外へ追いやり，ある臨界点に近づけるときに発生する状態」であり，そしてこの圧力は，「システムがその固有の方法で行動することをさまたげようとする」ものである。[15]

これは人間，社会にとっても重要な概念であると考える。とくにソーシャル・ワークにあっては，問題解決のための援助は前述のごとく個人と環境とのダイナミックな相互変革という視点から，そのシステムが崩壊してしまう以前に個人の特性，相互作用の範囲，問題の所在を明確にし，そして適切な援助——相互作用への専門的介入，がなされねばならないからである。

以上の一般的，基本的なシステムの議論にもとづいて，次にソーシャル・ワークへの適用について検討してみることにする。

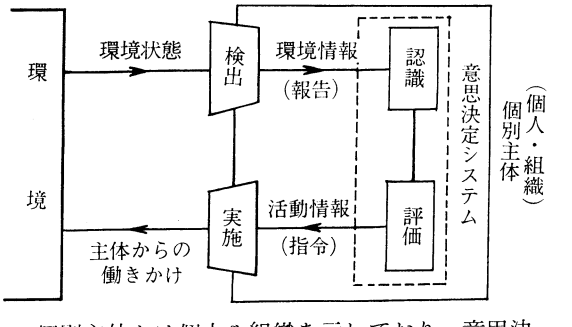
Ⅱ　ソーシャル・ワークへのシステムズ・アプローチ

Ⅱ-i　ソシャール・ワークの視点

D・ラスロウプはソーシャル・ワーク実践の対象である人間組織として次の7つのものをあげている。すなわち，個人，家族，仲間小集団 small peer group 社会化と治療の制度および共同体，近隣，コミュニティ，社会的レベル，以上である。これらはヒエラルキーの概念ではなく注意集中の単位としての〝組織化された複雑性 organized complexities〟——システムとしての——であり，伝統的にソーシャル・ワーカーが関与してきたものであるが，彼はこれらを，input—processing—output—feedback のパラダイムでとらえている。したがってソーシャル・ワーカーは以上の4つの要素，特にシステムとその環境との「境界 boundary」に介入するものであると理解される。[16] すなわちソーシャル・ワーカーは，対象としてのシステムがその機能を十分に発揮できるように，境界に目を向け，システムが崩壊に至らぬよう圧力を緩和，除外し，定常状態を維持しうるよう援助することに他ならない。リビング・システムあるいは人間組織は，圧力が生来しないように，あるいは圧力がすでにあらわれている場合にはそれによって生ずるかも知れない危険を防止するため，システム内外の要素を制御することを試みるのである。「機械的システムと比べて社会的システムが異なる大きな特徴は，社会的システムはシステム自体が目標や慣行，内部の組織構造を変革する能力をもっているということである。この場合システムは，その生存を可能にしている生命過程，あるいは本質的変数を守るために，その構造と過程をまったく作り変えてしまうことがある。」[17]

個別主体の構造は次のごとく図示される。その内部機構は先の制御機構と同じであり，ここではその環境との相互作用を図式的にみるためにとりあげた。[18]

図3　個別主体の構造



個別主体とは個人や組織を示しており，意思決定の主体に他ならない。個別主体は，「環境の変化を自分なりの方法で検出し，自分なりの枠組で

解釈し，自分なりの判断で選択を行なう。個別主体は，検出された環境状態の変化を伝える情報を処理し，いかなる対応が望ましいかに関する意思決定を行ない，それを実行に移している。」[19]
したがって，このモデルで分析的にみられるように，ソーシャル・ワークは「自分なり」におこなわれる検出，意思決定，実施という三つの個別主体の働きを援助するとともに，相互作用の観点から環境的諸要因をも変革する必要のあることが認識されうるであろう。換言すれば，この意思決定の主体たる個別主体が，その意思決定を主体的になし，そしてそれを主体的に実施しうるよう援助することである。ここでは単に環境への適応ではなく，個別主体の意思決定による，環境に対する主体からの働きかけが強調されていることに注意したい。

ソーシャル・ワークの中心的な焦点は，（ここではむしろ個人を中心としたケースワークの視点にたてば）person-in-environment (Janchill), person-situation-configuration (Hollis), person-in-his-life-situation (Gordon) といった合成句に示されるように，個人とその環境へ同時に二重の焦点 simultaneous dual focus を向けることにあるといえる。すなわちソーシャル・ワーク実践の目標は，個人と状況（環境）をマッチング matching させることであった。つまり個人と環境の間のインターフェイス interface（あるいは境界面 boundary surface）すなわち両者が遭遇する場所が焦点となるのである。ここでは相互影響作用 transaction ——行為あるいはアクティビティのコンテクストにおける交換——が起っており，そのインターフェイスにおいて双方からの行動がないならば交換は起りえない。

ゴードンは，この相互影響作用は，「組織と環境の表面的な要素と結びついた行為の場」，と定義し，前者の側にはコーピング行動 coping behavior を，後者の側には特に指示しない，影響を与える環境 impinging environment の質を問題とすることを提案している。この行為の場を通して両者の間の交換が行なわれるのであり，ソーシャル・ワーク実践の目標としてのマッチングの努力は，この両者が適切な交換をおこすことを知るための努力であり，専門的介入とは，そのインターフェイスにおいて一方あるいは双方に変化をおこさせるための努力を意味している。したがってソーシャル・ワーク専門職の技術の準拠枠のために次の研究と確立が必要である。

1．コーピングのパターンおよび環境的要求と，そこで起る種類と量のコンビネーションの関係。
2．これらの交換と個人の成長と発展および環境の改善との関係。[20]

インターフェイス（あるいは境界面）とは，ある「もの」とそれとは異質な別の「もの」とが接触し交流する部分をさす。ソーシャル・ワークとは，主体的な個人（ないし集団，地域社会）と環境の諸要素を明確化するとともに，その相互作用を全体として認識する。そしてこれがシステムとして，その全体が崩壊しないよう，むしろポジティブな変化，成長・発展をとげるように援助することなのである。

II-ii　システムとしてのパーソナリティ

パーソナリティは有機体のシステム——オープン・システムとして特徴づけられる。すなわちフロイド理論がいうところのイド，エゴ，スーパーエゴは，パーソナリティの構成要素とみなしてよい。したがってこのパーソナリティが環境との相互作用において緊張あるいは攪乱を来す場合，その個人とケースワーカーの相互作用——ケースワーク，コミュニケーションを通して得られるインプットによって，クライエントのエゴが現実を検証することが出来るように援助される。こうしてこのエゴに変化がもたらされることによって，エゴとイド，およびスーパーエゴとの相互作用の修正，すなわちシステムの〝創発的 emergent〟性質および個人の機能の修正が期待される。

もしケースワーカーが非常に強く押しつけるなら——早急に解釈したり，抑圧に挑戦したり，余りに高い期待を設定したりしたら，クライエントは不安を感じ，あたかもクローズド・システムにおけるがごとき，社会環境と相互作用のない「平衡」に退行してしまうかも知れない。[21]

パーソナリティをオープン・システムとして，相互作用を保持し，またそのプロセスを経て定常状態を維持しようとするものであると考えること

は，従来からもなされてきたわけであるが，それらは次の基準のどれを強調しているかによって分類されよう。

1．物質およびエネルギー交換。
2．定常状態の要求，ホメオスタシス。
3．パーソナリティの次の傾向の強調——定常状態をこえ，そしてかなりの不均衡を犠牲にしてでさえ，内的秩序を助長し生み出すために努力すること。
4．パーソン・システムとしての把握。社会システム，社会—文化科学（すなわち相互作用，文化，役割）の考慮。[22]

しかし前述のごとく，オープン・システムとしてシステムを捉えるということは，これら全ての要求に注意を向けることを意味している。したがってセラピストも社会科学について十分訓練される必要があるといえる。

L・ベルタランフィは一般システム理論の精神医学への適用について検討し，精神病は本質的に精神・身体的，有機体のシステム機能の乱れであり，精神医学的障害は，システムの諸機能という観点を用いて明快に定義できるとしている。そしてこの観点から，心理療法について次のごとくのべている。少し長いが引用する。

「心理身体的な有機体が一つの能動的システムであるならば，職業療法や付加療法はその当然の結果としてでてくる。創造的な潜在能力を喚起することのほうが受身の適合を行なわせるよりも重要である。もし，こうした考えが正しければ『過去を掘り起す』ことよりも現在の矛盾を見つめ，新たな統合を求め，目標と将来に向かって正しい位置を定めること，つまりシンボル的な予測をすることのほうが大切であろう。以上は当然のことながらこのようにして『システムとしての人格』に根ざそうとしている最近の心理療法の傾向を言いかえたものになってくる。最後に，もし現代のノイローゼの多くが生きることの無意味さからくる『実存的』なものであるならば，その場合には『ロゴテラピー』，つまりシンボル・レベルの治療法が当を得たものになるであろう。

したがって——『これこそ唯一』の哲学に陥ったり他の考え方を見下げたりすることがなければ——人格のシステム理論は心理学と精神病理学に正しい基礎を与えることができると思われる。」[23]

個人は家族の成員であり，家族は地域社会の構成要素である。この視点は家族の相互作用および家族治療についての問題を明確にする。すなわちシステムのいかなる部分における変化も他のある部分に変化を及ぼし，そして結果的に全体の行動に変化をもたらすこととなる。一人の家族成員の変化は他の成員にも変化を及ぼすというこの認識は，次の課題を強調する。すなわち一人の家族成員に働きかける場合，他の家族成員との相互作用およびクライエントと他の人々との相互作用を認識しなければならず，それ故ある人の，他に及ぼしうる変化の潜在的効果は，診断および治療計画の一部としなければならないということである。[24]

1つの例として黒人ゲットーにおける精神衛生サービスの提供へのシステムズ・アプローチを参考にとりあげてみる。これらの地域に住む人達は一般に広く存在している精神衛生問題，貧弱なセルフイメージおよび共存する無力感をもっているといわれる。これらは個々のゲットーの住民と，それをとりまく社会システムの間の相互影響作用のアウトカムとして考えられ，そこでこれらの問題を概念化するために次の三つの側面からみる。すなわち，

1．個々の心理学的アプローチ
2．社会—政治的な観点
3．相互影響作用とコミュニケーション，すなわち〝諸システム間のインターフェイス〟への注目，以上である。[25]

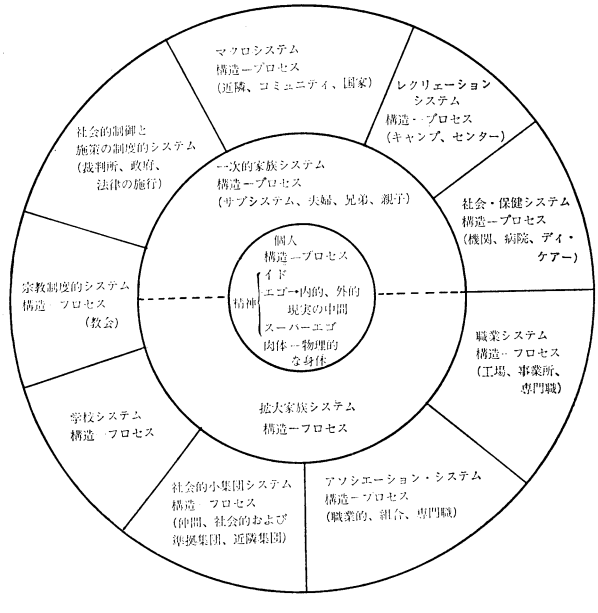
ここで特に留意されたことは，対象であるシステム——個人および地域社会——を患者としてとり扱わないこと，すなわち個人にはその自助を，地域社会に対してはその自助組織の価値の認識をしうるよう援助したことであった。したがって介入者 intervenor は助言者であり，個人の問題よりも戦略上重要なインターフェイスにおける相互影響作用及びコミュニケーションに注意の焦点を向けたことであった。かくして個人は患者であるというはずかしさからはるかに解放され，集団のメンバーとして公に認められるというプライドをもち，そして地域社会の内外において積極的なイ

メージを享受したのである。[26]

B・オーカットはパーソナリティ，家族，環境（社会諸制度）の相互作用を捉えているが，ここで彼はケースワークの焦点を概念化する枠組みとしてシステム理論を用いる。人間は生物学的—パーソナリティ・システムであり，家族システムの組成であるとともに，さらに環境全体というスプラシステムの組成として描かれている。すなわち家族は人間にとってのバイタルなスプラシステムとして示されており，その相互作用の全体はそれ自身の創発的特性をもっている。さらに，ここでとりあげられている環境としての構造・プロセスは，社会的サービスの制度および集団をも含んでおり，そのシステムの分析視角は必ずしも明確でないと思われるが，全体の環境スペースにおける社会・環境的システムと相互作用している状態を包括的に図のごとく示している。[27]

繰返しのべるが，これはシステムの組成（サブシステム）の変化はシステム全体（スプラシステム）に何らかの影響をもたらすということを前提としている。この概念は全てのレベルの体系的構造に用いられる。システムの流動性と相互の連繋は，ケースワーカーに対して伝統的な仮定と共にクライエントの困難を，相互作用をしているものとし，その全体を把握すること，そして介入のための焦点をさぐろうとする場合には，つながりあっているシステム間のストレスと緊張という重大な点を明確にするための手がかりを与えるといえる。[28]

図4　person/family-in-environmentのシステミックな構造



個人あるいは家族，組織など人間組織をシステムでとらえ，その内的要素をリジッドなものとしてではなく，環境と相互作用をしており，定常状態を維持あるいは環境に順応するものであること，そしてある目的をもって成長・発展していく有機的なものとして認識することは，パーソナリティ理論およびケースワークに対してもよい概念的基礎を提供すると考えられる。すなわちケースワーカーは，個人とその環境およびそれぞれの要素（サブシステム）の全体に目を向け，それらの相互作用の問題点を明確にする。相互作用は要素の間で起るものである。したがって相互作用の変革は，その要素に働きかけることによって成されるのはいうまでもない。介入行動を通して，その問題解決のための相互作用の修正をなすよう援助するのである。

II-iii　ケースワークからジェネリック・ソーシャル・ワークへ

前節で既に多くをのべたが，ケースワークへのシステム理論の応用について検討しておく。個人をオープン・システムとしてとらえること，心理・社会的側面へのアプローチとしてのクライエント・システムの認識は，〝ソーシャル〟ケースワークの認識に他ならず，したがってケースワーカーは家族はもとより，コミュニティなどのより広い観点にたったソーシャル・ワーカーであることが要求されよう。ゆえにこの観点に立てば，ケースワーク，グループ・ワークおよびコミュニティ・オーガニガーションという伝統的方法論をこえた，それらを統合するジェネリック・ソーシャル・ワークが提起されることとなる。

「システム理論は領域の全てのシステムに目を向けるようにさせる。実践者はシステム—環境の複合 complex を明確にし，クライエント・システムの境界を見出し，そしてシステムの開放性と閉鎖性の度合を評価する。相関したサブシステムから成る

ヒエラルキーのオープン・システムとしての人間組織の概念は，システムの部分間の相互関係，システム—環境の相互変換，およびその領域でのシステム間の相互関係についての実践者の認識に焦点をあてる。ワーカーはシステム—環境の相互変換と関係要因をクライエント・システムの目標志向および定常状態という意味でみる。」[29] ワーカーはクライエントをシステムとして把握する。すなわちクライエントの環境に対する応答性，それをインプットとして変換する能力等を評価すると同時に，クライエントの資源としての環境について認識せねばならない。クライエントは資源を知っているか，資源を有益に用いているか，またその変換のプロセスは適切か……。これらを分析的に考察することにって介入のための戦略が明らかになるであろう。

ワーカーはインプットとその変換のプロセスを認識せねばならない。すなわちクライエントは，どのようなインプットによって，いかなるアウトプット（ここでは問題状況といってよい）が生じているのか。したがってアウトプット変革のためには次の側面へのアプローチのあることが理解されよう。

1．変換プロセスが変らない場合，インプットをかえること。
2．インプットが変らない場合，変換プロセスを変革すること。
3．両者をダイナミックに変革すること。

一般にソーシャル・ワークでは第3の立場をとることになるであろう。インプットおよびクライエントの心理メカニズムや行動パターンを変革させる——クライエントが覚知するように援助することによって，アウトプットとして生起した問題状況の解決を図るのである。このダイナミックな過程は，フィードバックを介してラセン的に発展させられねばならない。

C・マイヤーは，伝統的ケースワークにおけるperson-in-situationという視点は，本来心理学および社会科学双方で扱うものであり，これらは異った理論であるが，これを一般システム理論において相互影響的あるいは場の構成概念とみることによって統一しうるとしている。そして人間の行動，社会，文化的要因，社会組織，社会計画および方法などについての理論が把握できるならば，それらすべての知識を利用するためにシステミックなアプローチが必要となるであろう。[30] このようにして相互に影響を与える全ての要素が理解されるならば，当該ケースは必然的に非常に広いスケールで把握されることになり，したがってソーシャル・ワーク実践にも顕著なインパクトを与え，さらにまた非専門的な人材の活用についても展望が開けることになるであろう。

彼は実例として，夫婦げんかで母親のなげたアルカリ液で大やけどを負った三才の男の子および一才半の妹のいる家族をとりあげ，その視点について検討している。この家族は低所得世帯で，父親は職業訓練を受けている。母親は高校生の時に結婚，出産そして中退したのでまだ学校への未練が強い。これがいわば一番の原因であった。

このような問題をもつ家族のケースについて，相互影響の場における社会システムとの間の，システミックな関係を次のごとく示している。[31] いうまでもなく，これをただ単に〝視点〟としてのみ考慮に入れるだけであるならば，伝統的ケースワークを脱皮しえない。コミュニティ・オーガニゼーションあるいは社会福祉計画をも含めた，すなわち環境変革をも意図したジェネリック・ソーシャル・ワークを志向したものとして，このケ

図5　事例にみる家族と社会システムの関係

病　院 医療制度 および パラ・メディカルな ソーシャル・ワークの スタッフとサービス		この家族に関する次のことがら 個々のパーソナリティー 家族文化 階級，人種，地位と役割 自我適応性 家族の生活様式
	家　族 **父……母** **息　子** **赤ん坊**	
ゲットー地域 住宅 コミュニティ・アクション集団 ＯＥＯ職業訓練		学　校 父親のための職業学校 母親のための高校 赤ん坊のためのデイ・ケアー 息子のためのヘッドスタート

ースの環境の範囲をとらえていかねばならないと考える。

ソーシャル・ワークの対象の認識という観点から一般システム理論を援用して検討してきた。個人は全く個としての存在ではなく，多様な社会関係を維持しており，それによって否定的な結果をも，また成長・発達をももたらされうる存在である。したがって，くどいようであるが繰返すなら，ソーシャル・ワークは，それらの諸関係の全体に目を向け，すなわち個人と社会環境との相互作用，そのインターフェイスに焦点をあて，そこにおける問題状況を，定常状態の維持　および個人の成長・発達という視点から認識することであった。ソーシャル・ワーク・プロセスの検討は，いうまでもなく調査—診断へのアプローチと同様，介入すなわち変革戦略へのレファレンスをも含んでいる。そこで特に実践者の治療に属する以下にみられるような，いくつかの考えをレヴューすることが有用となるであろう。

1．相関したシステム全体にかかわる。
2．変革をもたらすための知識の活用。
3．選択された環境のパラメーター，システムの変数に介入する。
4．相互影響作用をしているシステム間のエントロピーの最適分布を助長する。
5．危機状況における介入を導く。
6．情報とコミュニケーションの網　とくにインプット，内部プロセシング，アウトプット，フィードバックを含むシステムの変換プロセスへの実践者の介入に関係をもつ。[32]

ソーシャル・ワークはその対象を単に認識するのみにとどまらず，むしろその認識は援助を行う前提としてなされるべきものであるから，援助の方法——専門的介入が明らかにされねばならない。すなわち認識（いわゆる診断）および援助（治療）が一体となってこそ，ソーシャル・ワーク固有の視点といいうるからである。

そこで次には，固有の視点の後半，援助の側面について，とくに「計画的変革 planned change」という観点から考察してみることにしたい。

＊　本稿は社会福祉実践理論についての議論を前提として検討しているものであるが，紀要掲載の便宜上〔Ⅳ〕とする。したがって，本序説の基本的視点を示すものであり，次回〔Ⅴ〕では，援助の側面として以下の項目について検討する。

Ⅰ　専門的介入としての変革
　Ⅰ—i　ソーシャル・ワークにおける変革
　Ⅰ—ii　変革対象としての相互作用
Ⅱ　個別主体における変革
　Ⅱ—i　自己実現
　Ⅱ—ii　環境への適応
Ⅲ　社会環境の変革
　Ⅲ—i　計画的変革
　Ⅲ—ii　構造アプローチ

1）Scott Briar, "The Future of Social Work : an introduction", *Social Work*, vol.19, No. 5 (Sept. 1975), pp. 514—518.
2）K. E. ボールディング，岡本康雄訳「組織革命」，日本経済新聞社，昭47，p 133.
3）K.E. ボールディング，公文俊平訳，「経済学を超えて」，竹内書店，1970，pp. 89—98. ベルタランフィの修正については，長野・太田訳，「一般システム理論」，みすず書房，1973，p. 25.
4）Walter Buckley, *Sociology and Modern Systems Theory*, Prentice-Hall, 1967, pp. 36—39.
5）ボールディング，公文訳，前掲「経済学を超えて」，p. 98.
6）Ludwig von Bertalanffy, "General Systems Theory and Psychiatry", in Silvano Arieti ed., *American Handbook of Psychiatry*, Vol. 3, Basic Books, N.Y., 1966, p. 707.
7）James G. Miller, "Toward a General Theory for the Behavioral Sciences, "*American Psychologist*, vol.10, 1955, pp. 514—515.
8）S.L. オプトナー，植木繁訳，「システム分析入門」日本能率協会，昭44，p. 46.
9）J. G. Miller, op. cit., p. 516.
10）Gordon Hearn, "General Systems Theory and Social Work", in Francis J. Turner ed., *Social Work Treatment*, Free Press, 1974, pp. 345—348 ; Gordon Hearn, *Theory Building in Social Work*, Univ. of Tronto, 1958, pp. 39—46 ; John Goldmeier, "Applying a General Systems Approach to Consultation in Public Welfare, *Public Welfare*, vol. 29, No. 3 (Summer 1971), pp. 317—319 ; Gerald K. Rubin, "General Systems Theory : An Organismic Conception for Teaching Modalities of Social Work Intervention", *Smith College Studies in Social Work*, (Jan, 1973), pp. 211—218 ; Sister Mary Paul Janchill, R.G.S., "Systems Concepts in Casework Theory and Practice," *Social Casework*, vol. 50, No. 2 (Feb. 1969), pp. 77—81.
11）ベルタランフィ，長野・太田訳，前掲「一般システム理論」pp. 36—38.
12）G. Hearn, "General Systems Theory and Social Work," pp. 355—357.
13）Sifter Mary Paul Janchill, R.G.S., op. cit., p. 80.
14）G.K. Rubin, op. cit., pp. 213—214.
15）林勲「システムに関する一考察—システムへの圧力

と制御について—」青山経営論集，第7巻第3号，1972年12月，pp. 129—130.
16) Donald E. Lathrope, "The General Systems Approach in Social Work Practice" in Gordon Hearn ed., *The Systems Approach ; Contribution toward an Holistic Conception of Social Work*, Council on Social Work Education, 1969, pp. 45—62.
17) 林勲，前掲書，p. 131.
18) 村上泰亮，熊谷尚夫，公文俊平，「経済体制」，岩波，1973年，pp. 23—24.
19) 同，p. 22.
20) William E. Gordon, "Basic Constructs for an Integrative and Generative Conception of Social Work, "in Gordon Hearn ed., *The General Systems Approach ; Contribution toward an Holistic Conception of Social Work*, CSWE, 1969, pp. 6—10.
21) Florence Hollis, " '…And what shall we teach ?' the Social Work Educator and Knowledge," *Social Service Review*, vol. 42 No.2 (Jan. 1968), p. 192.
22) Gordon W. Allport, "The Open System in Personality Theory," *J. of Abnormal and Social Psychology* vol. 61, No. 3 (1960), pp. 303—307.
23) ベルタランフィ，長野・太田訳，前掲書，pp. 214—215.
24) F. Hollis, op. cit., p.193.
25) Richard H. Taber, "A Systems Approach to the Delivery of Mental Health Services in Black Ghettos," *Am. J. of Orthopsychiatry*, Vol. 40, No. 4 (Jul. 1970). pp. 702—703.
26) ibid., pp. 703—709.
27) Ben A. Orcutt, "Casework Intervention and the Problems of the Poor," *Social Casework*, vol. 54, No. 2 (Feb. 1973), p. 93.
28) ibid., p. 92.
29) Irma L. Stein, "The Systems Model and Social System Theory: Their Application to Casework,', in Herbert S.Strean ed., *Social Casework : Theories in Action*, Scarecrow Press, 1971, pp. 157—158.
30) Carol H. Meyer, *Social Work Practice : A Responce to the Urban Crisis*, Free Press, N.Y. 1970, pp. 124—127.
31) ibid., pp. 129—138.
32) I.L. Stein, op. cit., p. 163.